

中世日本の緡銭慣行

稲 吉 昭 彦

はじめに

中世日本が中国銅銭を中心とした銅銭を貨幣として使用していたことはよく知られている。銅銭は唐の開元通宝や北宋銭、明銭といった歴代中国王朝の銅銭をはじめ、中国銅銭を母銭として鑄造した模鑄銭や新規母銭から鑄造した通用銭、さらにはヴェトナムや日本で鑄造したものなど、様々な銭種が存在したが、その形態は必ず円形方孔（丸い形で四角の孔）であった⁽¹⁾。また銅銭の存在形態は、銅銭個別の状態と孔に紐を通した状態に分類され、後者の状態を緡銭という。

中世日本における緡銭の研究は、主に短陌（省陌）の問題を取り上げてきた。小葉田淳の基礎的な研究を契機に、銭百文は何枚かという問いを文献史料と出土銭から分析した石井進の研究、考古・文献・絵画資料から緡銭の表現方法を明らかにした渡政和の研究、実枚数と名目額の差に着目し、目銭の意味を考察した伊藤俊一⁽²⁾の研究、伊勢神宮地域における「特殊省百法」の実相を明らかにした千枝大志の研究などがある。先学の研究は、緡銭のありようや短陌（省陌）の意味を検討してきたが、緡銭がどのように歴史的変容をとげてゆくのか、この点については必ずしも明確にされていない。また、そもそも短陌（省陌）とは何か、という問題も不明瞭のままである。

では、どのような観点から分析すればよいだろうか。本稿では、上記の問題を克服するために、短陌（省陌）の計算方法を分析方法として加えることにしたい。中世日本における短陌（省陌）の計算方法については、伊藤俊一が目銭の意味を論じるなかでその存在についてふれる程度で、その歴史的な意味はあ⁽⁷⁾

まり論じられていない。しかしながら、中国の短陌研究をみても、宮澤知之が宋代における短陌の問題を論じるなかで、短陌の計算方法を分析の俎上にのせ、宋代における貨幣経済の特質を明らかにしている⁽⁸⁾。さらに宮澤は、六朝時代における短陌の問題を取り上げたなかで、宋代の短陌と比較検討し、その内容と意義を明らかにした⁽⁹⁾。こうした点を踏まえると、短陌（省陌）の計算方法の検討は日本においても有効な分析方法の一つと考えられる。つまり、中世日本の緡銭を論じるなかで、短陌（省陌）の計算方法を分析し、それを歴史的に位置づけることは、緡銭の様相が明らかになるだけでなく、当該期における貨幣の特質を追究できると思われる。

以上のような観点から、本稿ではまず中世日本における緡銭の実態について確認した上で、短陌（省陌）の計算方法について分析することによって、当該期における緡銭の歴史的変容を明らかにしたい。

1 中世日本の緡銭

本章では、短陌（省陌）の計算方法の分析に入る前に、中世日本の緡銭がどのように使用されていたのかを確認し、そこから当該期における緡銭の実態を探ることとする。

緡銭とは錢貨の中央の孔に紐を通したもので、いわば錢の集合体である。緡銭が用いられたのは、中国や日本など錢を貨幣としていた地域であった。そのまともは各々の国によって違っており、たとえば中国の緡銭は「一貫文」を基本構成としたのに対して、日本の緡銭が「百文」を基本構成とした。また日本では、「一貫文」の緡銭を表現する「結」や「百文」の緡銭を表現する「連」という単位が存在したことが知られている⁽¹⁰⁾。

では、中世日本において緡銭を使用するさい、どのような特徴を有していたのだろうか。

まず第一に、短陌（省陌）が存在したことである。短陌（省陌）とは百枚未満の錢を百文とみなすことである（以下、引用部分を除き、用語を短陌に統一する）。それに対して、百枚の錢を百文とみなすことを足陌（調百・丁百）という。周知のごとく、短陌は中国だけでなく、日本においても存在した。小葉

田淳は、「日本では鎌倉中期以来、その慣用が文献上にも見え、調百を省いた銭数を目銭とよび、算用状に目足つまり目銭を加えた場合「加目銭」、また省いた場合を「目引」と記している。当時は目銭三文即ち九十七文をもって百文通用とすることが行われ、室町後期までその慣行が見られる。(中略)十六世紀中ごろ以来、九十七文陌から九十六文陌に移ったのは、通用上の便宜からであろう。(中略)江戸時代を通じてこの省陌法が行われ、俗に九六とよんだ」と説明する。⁽¹¹⁾

しかし近年、千枝大志が伊勢神宮地域における「特殊省百法」を明らかにされてお⁽¹²⁾り、その実態は小葉田淳の説明とはかなりの乖離があるように思われる。千枝によれば、15世紀末期の伊勢神宮地域では「七十二文銭」と「九十六文銭」の二種類が出現し、前者が下行用銭貨として、後者が基準的銭貨として存在していたとされる。さらに、16世紀後半から「九十銭」や「九十一銭」が確認でき、これらは「七十二文銭」や「九十六文銭」の後出として創出されたと説明する。

では、16世紀後半における短陌に関する史料を検討してみよう。

【史料1】

うけとり申代の事

合八百文定、但九十七文銭

右まへの与右衛門尉方ニあつけをかれ候代の残也、以上、

天正十九

壬正月廿八日

安富

源二郎（花押）

しふや与右衛門尉殿

まいる

【史料2】

新町替之畠

宇野令之内坪付之事

合

はやまた

畠半

代三百文

藤左衛門

同所

畠半卅分 代三百五十文 新兵衛

同所

畠九十歩 代八十文 藤左衛門

同所

散司

畠半 代三百文 新左衛門

柿本ノもと

畠壹反小 代八百五十文 同人

以上 畠敷三反六十歩

鍛壹貫八百八十文

当料ニメ五貫九百十六文 目錢共

但九十六文錢

右之前為新町替畠打渡如件、

文禄五年

正月廿日

三浦

内左衛門尉在判

善福寺

右式通繼立之裏ニ

今度御究相澄畢

文禄五年五月廿五日

國司備後守

小林寺

山田吉兵衛在判

【史料1】は天正19年（1591）、安富源二郎が渋谷与右衛門尉に宛てた代物請取状である。備後国尾道を拠点とした渋谷氏は毛利氏の御用商人として活動していたことが知られているが、⁽¹³⁾ここでは安富源二郎が渋谷与右衛門尉に預けていた残り分の錢貨800文を受け取ったことがわかる。また、「合八百文定、但九十七文錢」とみえるように、受け取った錢貨の緡錢状況を注記しており、この「但九十七文錢」という文言は短陌の値を示していると考えられる。すなわち、受領した錢貨は97枚で「百文」とみなす緡錢であった。

【史料2】は三浦内左衛門尉が周防国山口の善福寺に宛てた打渡状である。⁽¹⁵⁾

これによれば、文禄5年（1596）正月20日に新町替として畠が善福寺に打ち渡されたことがわかる。畠数は3反60歩で、その分銭は「鍛」1貫880文を基準とし、「当料」に換算して5貫916文と表示されている。すでに本多博之が明らかにしたように、「鍛」は毛利氏領国内で広く流通していた銭貨で、畠分銭の基準銭として「鍛」が採用されており、また「当料」は実際の通用銭で、その額は「鍛」を基準として換算された⁽¹⁶⁾。かかる「鍛」や「当料」については重要な問題の一つであるが、ここでは「当料」5貫916文が「九十六文銭」という点に注目したい。ここでの「九十六文銭」は短陌の値と考えられる。すなわち、この「当料」5貫916文は96枚で「百文」とみなす緡銭であった。

このように、【史料1】と【史料2】の検討から同時期に「九十七文銭」（備後国尾道）と「九十六文銭」（周防国山口）の短陌が存在したことが明らかになった。すなわち、「九十七文銭」から「九十六文銭」へと単純に変化していくのではなく、「九十七文銭」と「九十六文銭」の短陌が同時期に併存していたのであった。

先にあげた千枝大志の研究をふまえると、中世後期の日本では、「九十七文銭」や「九十六文銭」、さらには「七十二文銭」・「九十銭」・「九十一銭」といった様々な値の短陌が併存していた状況であったといえるだろう。

中世日本における緡銭の特徴の第二は、中世後期において異なる銭種をある一定の比率で混在した緡銭が存在したことである。すでに先学によって明らかにされているように、それは緡銭に永楽銭などの明銭や荒銭を混在していた⁽¹⁷⁾。桜井英治は「複数の銭種を合成して別の新しい銭種カテゴリーを構成しようとする発想ないし方法」または「精銭もしくは基準銭に一定量の明銭や低銭を混入してサシ銭をつくる慣行」を「組成主義」⁽¹⁸⁾と称している。

では、つぎに掲げる史料から、その実態を確認してみよう。

【史料3】

四月廿七日、局就歸参、大もん恩借之事、

大もん御くらに御かりの物三百疋こし候て、うけとりまいらせ候、めてたくやかて々々々返しつかわされ候、かしく、

ゑい正十二ねん四月廿七日

をし判 うきやう

ひろハし殿令申給へ
永正十二年四月廿七日 ^(守光)
(花押)

此要脚、局借渡之間、永楽二十宛分可申付之云々、

【史料4】

(端裏書)

「(切封) 木本殿 渡瀬与四郎^(辛)信重」

昨日ハ料足事色々御身^(者脱力)勞中々難申尽存候、昨日壹貫六百五十文請取申、殘分此舛に可渡給候、然者百文ニ永楽廿さし分御渡候て可給候、返々畏存候、趣まいり御礼を可申候、恐々謹言、

十二月十六日

^(渡瀬)
信重 (花押)

【史料3】は「守光公記」永正12年(1515)4月27日条である。⁽¹⁹⁾廣橋守光が禁裏御倉の立入宗康から要脚「三百疋」(3貫文)を借用したが、それが「永楽二十宛分」つまり緡銭の中に永楽銭20文が混在していたことがわかる。

【史料4】は渡瀬与四郎信重が木本に宛てた書状である。⁽²⁰⁾年代については定かではないものの、永正7年(1510)12月の目代重増日記紙背文書であることから、それ以前であることは確かであろう。これによれば、渡瀬与四郎信重が1貫650文を受け取ったが、その銭貨は「百文ニ永楽廿さし分」とあるように、「百文」のうち永楽銭20文の緡銭であったことがわかる。

ほかにも、『鹿苑日録』明応8年(1499)12月28日条に「自北鹿苑寺、眞如寺作州豊田年貢銭拾貫文持来、但永楽十文指也云爾」⁽²¹⁾とあるように、眞如寺領美作国豊田莊年貢銭10貫文が到来したが、緡銭の中に永楽銭10文が混在していることがわかる。

明銭を混在した緡銭の場合、緡銭じたいが精銭として扱われており、明銭と他の銭貨との比価は一対一(等価)である。また、明銭が「永楽」といった固有の名称で表示されており、北宋銭とは異なる銭貨と認識されていた。

このように、緡銭のなかに永楽銭などを混在して使用していたことが確認できたが、当該期においてこのような緡銭が滞りなく使用されていたかというところは実はずも無く、緡銭を精銭と悪銭に区別していた。

【史料5】

(端裏内封ウハ書)

「(異筆)

「延徳三年七月三貫文」

近聴院納所

橘坊 若狭殿進之

公維」

返々、あく錢百文別二十文あて御入候、可為如何候哉、此事者不及申候、已後者御せん々々候て可給候、又請取別紙ニ進候、五智輪院より之御料足、只今參貫文請取申候、いと成少事給候、迷惑此事候、相残分堅御申候て可給候、尾籠なから其様の御無沙汰と存候、仍御借状之事心得申候、更々此方之非如在候、到来候者可進候、返々彼方へ御催促之儀不可有由断候、此由私より可申候由、坊主被申候、恐惶謹言、

七月廿一日

納所

公維 (花押)

橘坊

若狭殿

進之候

【史料5】は7月21日付け近聴院納所公維が橘坊若狭に宛てた書状である。⁽²²⁾これによれば、近聴院納所公維が五智輪院からの料足三貫文を受け取り、残分の返済を催促していることがわかる。鍛代敏雄によれば、橘坊は五智輪院と近聞院との借錢問題があり、文明期以後、橘坊は近聞院からの「度々借錢」について借状6通50貫文の紛失状を得ており、長享3年(1489)には近聞院側から返済を迫られているとされる。⁽²³⁾したがって、ここでの料足3貫文は近聞院側から返済を迫られた借錢の一部と思われる。

ここで注目すべきは、悪銭が「百文」に「十文」づつ入ってたことを問いただし、今後は撰銭して受け取るとした点である。ここから、受け取った錢貨が2種類から構成された緡銭であり、その内の「十文」を「悪銭」と認識していることがわかる。また、ここでは撰銭されていないものの、仮に撰銭されたならば悪銭は支払人に返却されたと考えられる。⁽²⁴⁾

では、緡銭のなかの悪銭はどのように返却されるのであろうか。悪銭の返却はつぎの二方法が想定できる、ひとつは、緡銭のなかの悪銭だけを返却する場

合である。この場合、緡銭のなかの一枚ごとが悪銭として認識されていると理解できる。いまひとつは、悪銭が混在している緡銭ごと返却する場合である。この場合、緡銭ごと悪銭として扱われたと理解できる。いずれにせよ、二種類とも使用できる範囲でない銭貨として使用できないとはいえるだろう。

以上のように、中世日本の緡銭を使用するさいの特徴について分析した。緡銭を使用するさいの特徴は、百枚未満の銭を百文として使用する短陌と異なる銭種をある一定の比率で混在する緡銭がみられることである。両者は併存でき、組み合わせた緡銭も存在した。千枝大志が紹介した「七十二文銭」の「悪銭卅二文さし」⁽²⁵⁾という事例はまさにそれにあたる。

2 短陌の計算方法

本章では、短陌の計算方法について考えていきたい。短陌の計算方法をはじめ⁽²⁶⁾て本格的に検討したのが宮澤知之である。宮澤は、中国宋代における短陌の問題を財政上の短陌、銅銭と紙幣の交換レートとしての短陌、商品流通にかかわる短陌に分類した上で、その具体的内容を検討し、そのなかで短陌の計算方法には二つの方式が存在することを明らかにした⁽²⁷⁾（表1）。ひとつは短陌の値を位取りとして用いる位取り方式であり⁽²⁸⁾、価格は財貨の交換価値と一対一で対応するものの、これを比例的に表示できないとされる。いまひとつは短陌の値を比例定数として用いる比例定数方式であり、価格は銅銭の実数で示される財貨の交換価値を比例的に表示できるとされる。これら二方式は位取り方式が銅銭と紙幣の換算や商品流通にかかわる短陌で使用され、比例定数方式が国家の財政上、省銭に換算するときに用いられた。そして、宋代の商品市場における

表 1 短陌の計算式

	位取り方式	比例定数方式
実 枚 数	実枚数 = (緡銭数 × 短陌値) + パラ銭数 (0 ≤ パラ銭数 < 短陌値)	
価 格	価格 = 緡銭数 × 100 + パラ銭数	価格 = (緡銭数 × 短陌値 + パラ銭数) × $\frac{100}{\text{短陌値}}$
実枚数と価格との関係	価格 = 実枚数 + 緡銭数 × (100 - 短陌値)	価格 = 実枚数 × $\frac{100}{\text{短陌値}}$

価格の形成が位取り方式をとる短陌の存在によって商品が本来もっている交換価値を正しく反映しないこと、異なる短陌の存在によって当時の市場的流通は孤立的であったこと、孤立的ではあっても一応独立した生産流通の機構が形成され、国家の直接的、統率的な商業政策を後退させたこと、などが指摘されている。

さて、中世日本における銭貨使用の場では、位取り方式の計算方法が用いられているが、史料上その様相は短陌の緡銭をバラすときやそれとは逆に短陌の緡銭をつくるときに表面にあらわれる。

まず、短陌の緡銭をバラした事例としてつぎの史料をみてみたい。

【史料6】

(九日)

一、同日、西京よりの能信取沙汰にて料足壹貫文、是を能忠三百卅二文、目代三百卅二文、能信三百卅二文つゝ分候て給御法也、百卅二文未進也、

【史料6】は「目代日記」永禄3年(1560)9月9日条である。⁽²⁹⁾これによれば、「西京」から届く銭1貫文は、能忠・目代(慶世)・能信の3人に332文づつ分配する「御法」であったことがわかる。当該期の「西京」は、北野社の御供所である「八嶋屋」に御供・饒供を貢納していた。⁽³⁰⁾それは月3度(毎月1日・11日・21日)の御供と年3度(毎年3月3日・5月5日・9月9日)の饒供を基本とし、定期的に行われていた。⁽³¹⁾よって、「西京」から届く銭1貫文は9月9日の饒供として納められるものと考えられる。

ここで注目したいのは、1貫文を3人で分けた結果が一人あたり332文となっていることである。たとえば、1貫文が1000枚の現銭と想定して、3人に分配すると、

$$1,000\text{枚} \div 3\text{人} = 333\text{文余り}1\text{文}$$

となり、実際の332文とは異なってしまう。この場合の計算式は、

$$1\text{貫文} = 10\text{緡}$$

$$10\text{緡} \div 3\text{人} = 3\text{緡余り}1\text{緡}$$

$$1\text{緡} \div 3\text{人} = 32\text{文}$$

$$3\text{緡} + 32\text{文} = 332\text{文}$$

となる。1貫文は1000枚の現銭ではなく、10個の緡銭であり、それを3人で分けて一人あたり3緡となる。余った1緡をバラして3人で分けると32文ずつ受け取っており、1緡が96枚であったことが判明する。能忠・目代（慶世）・能信の3人が受け取った332文の内実は3緡と32枚であり、緡銭（名目額）とバラ銭（実枚数）の組み合わせであった。なお、銭の実枚数は320枚（3緡×96文銭+32枚=320枚）となる。

つぎに短陌の緡銭をつくって計算した事例としてつぎの史料を掲げる。

【史料7】

（端裏ウハ書）

「當庵へ之
長芦寺より之算用状共也、色々日記在之」

永正十六年

如意庵施食小日記

棚盛内

廿五文	茄子汁菜共
廿五文	瓜
三文	水向米
三文	落葉
卅文	虫火
廿文	油ランタウ迄
六十五文	幡帟色々
百廿四文	米 ^{七舁五合} 内八合河原者
在	根芋
在	枚大豆
在	大角豆

以上

同酒并肴之入目

六百卅二文	酒
貳百文	餅

卅五文	白瓜
七十八文	棚汁菜 増共
廿文	薪
六十文	桃果子
三文	筋
五文	大根
三文	酢
十文	夕顔
十二文	引合䟽昏
在	梅干
在	干薇

以上壹貫三百六十五文

【史料7】は、永正16年（1519）の如意庵施食小日記である。⁽³²⁾これは、施食に必要な材料や酒・肴の費用が記されているが、ここではその合計金額が「壹貫三百六十五文」であったことに注目したい。仮に短陌の絹銭を前提とせずに合計金額を計算してみると

25文+25文+ 3 文+ 3 文+30文+20文+65文+124文+632文+200文+35
文+78文+20文+60文+ 3 文+5文+3文+10文+12文=1353文

となり、「壹貫三百六十五文」とは12文の誤差が生まれる。この場合、短陌の絹銭とバラ銭を考慮とした上で、合計金額を計算する必要がある。その計算式は、

(1 緡+ 6 緡+ 2 緡)+ (25枚+25枚+ 3 枚+ 3 枚+30枚+20枚+65枚+
24枚+32枚+35枚+78枚+20枚+60枚+ 3 枚+ 5 枚+ 3 枚+10枚+12
枚)= 9 緡+ (453枚)= 9 緡+ (97× 4) 枚+65枚=13緡+65枚=1365文
となる。絹銭とバラ銭を区別して数えると絹銭9 緡とバラ銭453枚であったことがわかる。短陌値「九十七文銭」と設定した上で、バラ銭453枚から絹銭をつくると4 緡でき、残り65枚となる。とすれば、13緡の絹銭と65枚のバラ銭
(= 1 貫365文)であり、合計金額が一致する。すなわち、ここでの「壹貫三百六十五文」とは、13緡の絹銭と65枚のバラ銭であったことが判明する。

銭がある一定の枚数（短陌値）に達した時に緡銭ができ、それを切った時にバラ銭になる。つまり、位取り方式は短陌の値に達していないと実枚数、短陌の値になった場合に名目額で表される。これは、位取り方式の価格が実枚数と名目額の組み合わせによって形成されていることを意味している。

さて、このように中世日本の位取り方式について検討したが、中世日本（少なくとも銭貨使用の場）において比例定数方式の計算方法を用いた事例は管見の限り存在しない。しかし、江戸初期の和算書には位取り方式と比例定数方式の換算が確認でき、そのひとつが『因帰算歌』という和算書である。⁽³³⁾これは寛永17年（1640）に今村知商が著したものであるが、その例題には位取り方式と比例定数方式との換算が記されている。

【史料 8】

(a)

又銭百と数六十六文あり、但数九十六文を百ニして此数を百位になをして
百六八七五ニ成

此式モ帰両直同意

百と文あるは文はかり 九六わり

幾百幾幾 幾と知なり

(b)

又銭百六八七五あり 但百は数九十六文ニして此幾幾を文になをして百六
十六文ニ成

此式モ因両直同意

幾百幾 幾幾はかり 九六かけ

幾百幾十 幾文としる

(a) は「数」を「百位」に換算する例題である。「銭百と数六十六文」とあるのは、名目額「百文」と実枚数「六十六文」の組み合わせで、これは位取り方式の値を意味する。また、「但数九十六文を百にして」とあるのは、実枚数から名目額にすることを指し、その時の短陌値は96ということがわかる。そして、「百六八七五」はこの式の答えで、名目値を表示している。「百と文あるは文はかり九六わり」は計算方法を表しており、この計算式は、

$$100\text{文} + (66\text{文} \div 96 \times 100) = 168.75$$

となる。「百六八七五」とは比例定数方式で計算した結果の値を意味する。したがって、この計算式は、位取り方式から比例定数方式に換算することを示している。

(b) は「百位」以下の値の「幾々」を「文」に換算する式の例題である。「銭百六八七五」とあるのは銭の名目額を表し、これは比例定数方式での名目額を意味する。また「但百は数九十六にして」とあるのは、名目額から実枚数への換算であり、短陌値が96ということがわかる。「百六十六文」がこの間の答で、名目額と実枚数を表示している。「幾百幾、幾幾はかり九六かけ」は計算方法を表し、この計算式は、

$$100\text{文} + (68.75 \times 96 \div 100) = 166\text{文}$$

である。「百六十六文」とは位取り方式で計算した結果の値を意味する。したがって、この計算式は比例定数方式から位取り方式に換算することを示している。

では、位取り方式と比例定数方式の換算はいかなる場合に用いたのであろうか。この問題を考えるには江戸初期の和算書である『塵劫記』が参考になるだろう。⁽³⁴⁾

【史料9】

(a)

▲せにかはゞ、さうはでかねをわりてよし、百よりうちハ四をかけてひく
銀七拾六匁七分有時、せに^(に脱カ)壹貫文ニ付、十六匁にして、右之かねにハ、
せに、な程そといふ時、
せに四貫七百九十文といふ、
右にかね七十六匁七分を置、十六匁にてわる、百よりうちにハ、しもより四をかけて引也、

(b)

せに七貫三百七拾貳文有時、一貫文ニ付、十八匁にして、右之せにのかね
なにほとそといふ時に、
銀百三拾貳匁七分五りといふ、
せにを右に置、先七十貳文に目をいたして置時七貫三百七十五文と成、

これに十八匁をかける也、

【史料9】は吉田光由が著した『塵劫記』の第十四「せにうりかひの事」の一部である。初版の刊行年はわかっていないが、『塵劫記』の序文に寛永4年⁽³⁵⁾(1627)とあることから、寛永4年(1627)またはそれ以前とされる。

(a) は銀を銭に交換するときの例題である。銭1貫文につき銀16匁であるとき、銀76匁7分は銭ではいくらかという問題で、その答えが4貫790文である。計算式は、

$$76.7\text{匁} \div 16\text{匁} = 4.79375\text{貫文} = 4,793.75\text{文} = 47\text{緡}93.75\text{文}$$

$$1\text{貫文} = 16\text{匁}$$

$$93.75\text{文} \times 1.04 = 97.5\text{文}$$

$$97.5\text{文} - 93.75\text{文} = 3.75\text{文}$$

$$4,793.75\text{文} - 3.75\text{文} = 4,790\text{文}$$

となる。まず、「かね七十六匁七分を置、十六匁にてわる」とあるように、76匁7分を16匁でわると銭4貫793文75となる。「百よりうちにハ、しもより四をかけて引也」とあるように、93文75に1.04をかけて97文5となり、97文5を93文75で引くと3文75となる。さらに銭4貫793文75を3文75で引くと4貫790文となる。

以上の計算式は『塵劫記』に記されたものをそのまま数式で表したものである。非常に複雑であるが、実はこの場合、【史料8】の計算式を用いて、「百」以下を「九六かけ」でも表すことができる。計算式は、

$$76.7\text{匁} \div 16\text{匁} = 4.79375\text{貫文} = 4,793.75\text{文} = 47\text{緡}93.75\text{文}$$

$$1\text{貫文} = 16\text{匁}$$

$$93.75\text{文} \times 0.96 = 90\text{文}$$

$$4,700\text{文} + 90\text{文} = 4,790\text{文}$$

となる。この計算は比例定数方式から位取り方式に換算することを意味しており、ここでの短陌の値は96である。

(b) は銭を銀に交換するときの例題である。銭一貫文につき銀一八匁であるとき、銭七貫三七二文は銀でいくらほどかという問題で、その答えが銀一三二匁七分五厘である。計算式は

銭7,372文=7.372貫文=73緡72文

1貫文=18匁

72文÷0.96=75文

7.375貫文×18匁=132匁7分5厘

となる。「七十式文に目をいたして置」とあるのは、位取り方式から比例定数方式に換算（72文÷0.96=75文）を意味する。換算すると、「七貫三百七十五文」となり、これに18匁をかけると132匁7分5厘となる。

ここで注目すべきは、銭と銀の交換のさいに計算方式を変えていることである。銀を銭に交換する場合は比例定数方式から位取り方式に変換し、それとは逆に、銭を銀に交換する場合、位取り方式から比例定数方式に変換している。絹銭の価値を銭で価格表示するときは位取り方式を用いるのに対して、絹銭の価値を銀で価格表示するときは比例定数方式を用いる。これは銀が比例定数方式で、銭が位取り方式で、価格表示していることを意味する。

このように計算方式を変換することは、『因帰算歌』や『塵劫記』といった和算書だけでなく、「年行事帳」といった当該期の勘定記録などでも確認できる。

【史料10】

(a)

万遣方覚

(中略)

已上

一、惣請取方

五百四十式匁七分六リン九モ^(毛)

一、遣方

四百九十三匁式分七リン

一、料足遣方

壹貫四百六十三文、十八匁五分銀ニ直シテ

此銀廿七匁壹分壹リン

遣方

二口合五百式拾目三分八リン

引残而廿弍匁三分八リン九毛

(b)

遣方覚

(中略)

右之帳面銀子払方

壹貫六百五拾六匁八分八リン三毛

錢之払方三貫貳百七拾八文ヲ十六匁ノさん用ニ銀ニ直シ五拾弍匁五分也、
右惣高合払方壹貫七百九匁三分八リン三毛也、

右指引残而卅壹匁参分九リン五毛也、

(c)

錢銀払方覚

(中略)

右払方之銀、都合六百六拾三匁七分七リン

同払方之錢、都合二貫八百九十文

右十六匁錢ニ直シ、四拾六匁三分

右二口合七百拾匁七リン

【史料10】は「年行事帳」と題する北野社宮仕「衆中」の勘定記録である。

(a) は寛永 7 年 (1630) 12 月～寛永 8 年 (1631) 11 月の「万遣方覚」⁽³⁶⁾で、

(b) は慶安 2 年 (1649) 12 月～慶安 3 年 (1650) 11 月の「遣方覚」⁽³⁷⁾で、(c) は寛文 2 年 (1662) 12 月～寛文 3 年 (1663) 11 月の「錢銀払方覚」⁽³⁸⁾である。これらによれば、銀と錢の支出をそれぞれ表示したうえで、錢を銀に換算していることがわかる。

ここで注目すべきことは、支出の錢を銀に換算する方法である。

(a) の場合、錢一貫文につき銀「十八匁五分」のとき、錢「壹貫四百六十三文」を銀に換算すると「廿七匁壹分壹リン」となる。短陌の計算方式を変換しないで、つまり足陌で計算すると、

錢 1 貫文＝銀18.5匁

$1.463 \text{ 貫文} \times 18.5 \text{ 匁} = 27.0655 \text{ 匁}$

となり、銀「廿七匁壹分壹リン」にはならない。そこで短陌値を96と仮定し、

計算方式を位取り方式から比例定数方式に変換したうえで計算すると、

$$1 \text{ 貫} 463 \text{ 文} = 14 \text{ 緡} 63 \text{ 文}$$

$$\text{銭} 1 \text{ 貫文} = 18.5 \text{ 匁}$$

$$63 \text{ 文} \div 0.96 = 65.625 \text{ 文}$$

$$1.465625 \text{ 貫文} \times 18.5 \text{ 匁} = 27.1140625 \text{ 匁}$$

となり、毛の位を四捨五入すれば、銀「廿七匁壹分壹リン」と一致する。

(b) の場合、銭一貫文につき銀「十六匁」のとき、銭「三貫貳百七拾八文」を銀に換算すると「五拾貳匁五分」となる。短陌の計算方式を変換しないで足陌で計算すると、

$$\text{銭} 1 \text{ 貫文} = \text{銀} 16 \text{ 匁}$$

$$3.278 \text{ 貫文} \times 16 \text{ 匁} = 52.448 \text{ 匁}$$

となり、銀「五拾貳匁五分」にはならない。そこで (a) と同様に、短陌値を 96 と仮定し、計算方式を位取り方式から比例定数方式に変換したうえで計算すると、

$$3 \text{ 貫} 278 \text{ 文} = 32 \text{ 緡} 78 \text{ 文}$$

$$\text{銭} 1 \text{ 貫文} = \text{銀} 16 \text{ 匁}$$

$$78 \text{ 文} \div 0.96 = 81.25 \text{ 文}$$

$$3.28125 \text{ 貫文} \times 16 \text{ 匁} = 52.5 \text{ 匁}$$

となり、銀「五拾貳匁五分」と一致する。

(c) の場合、銭一貫文につき銀「十六匁」のとき、銭「二貫八百九十文」を銀に換算すると「四拾六匁三分」となる。短陌の計算方式を変換しないで足陌で計算すると、

$$\text{銭} 1 \text{ 貫文} = \text{銀} 16 \text{ 匁}$$

$$2.890 \text{ 貫文} \times 16 \text{ 匁} = 46.24 \text{ 匁}$$

となり、銀「四拾六匁三分」にはならない。ここでも (a) や (b) と同様に、短陌値を 96 と仮定し、計算方式を位取り方式から比例定数方式に変換したうえで計算すると、

$$2 \text{ 貫} 890 \text{ 文} = 28 \text{ 緡} 90 \text{ 文}$$

$$\text{銭} 1 \text{ 貫文} = \text{銀} 16 \text{ 匁}$$

表2 短陌値96の場合の価格

実枚数	比例定数方式	位取り方式
192枚	200文	200文
191	198.958333.....	195
190	197.916666.....	194
189	196.875	193
188	195.833333.....	192
187	194.791666.....	191
186	193.75	190
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
166	172.916666.....	170
165	171.875	169
164	170.833333.....	168
163	169.791666.....	167
162枚	168.75文	166文
161	167.708333.....	165
160	166.666666.....	164
159	165.625	163
158	164.583333.....	162
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
100	104.1666666.....	104
99	103.125	103
98	102.0833333.....	102
97	101.0416666.....	101
96枚	100文	100文
95	98.958333.....	95
94	97.916666.....	94
93	96.875	93
92	95.833333.....	92
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮
7	7.2916666.....	7
6	6.25	6
5	5.2083333.....	5
4	4.1666666.....	4
3	3.125	3
2	2.0833333.....	2
1	1.0416666.....	1

$$90\text{文} \div 0.96 = 93.75\text{文}$$

$$2.89375\text{貫文} \times 16 = 46.3\text{匁}$$

となり、銀「四拾六匁三分」と一致する。

このように、銭から銀に換算するときに計算方式を位取り方式から比例定数方式に変換していることが明らかであろう。

では、なぜ短陌の計算方式を変換したのであろうか。この問題は位取り方式と比例定数方式の価格表示の方法に要因があると考えられる。実は、銭百枚を「百文」とする足陌では、位取り方式と比例定数方式の価格は一致するが、銭百枚未満を「百文」とする短陌では、位取り方式と比例定数方式の価格が違ってくる。表2は、短陌値96のとき、位取り方式と比例定数方式の価格を示したもので、図1～3はそれを図示したものである。図は縦軸が価格、横軸が銭の枚数を表し、図1が位取り方式の価格、図2が比例定数方式の価格、図3が位取り方式と比例定数方式の価格差を示してる。これによれば、「百文」・「二百文」といった場合を除いて、位

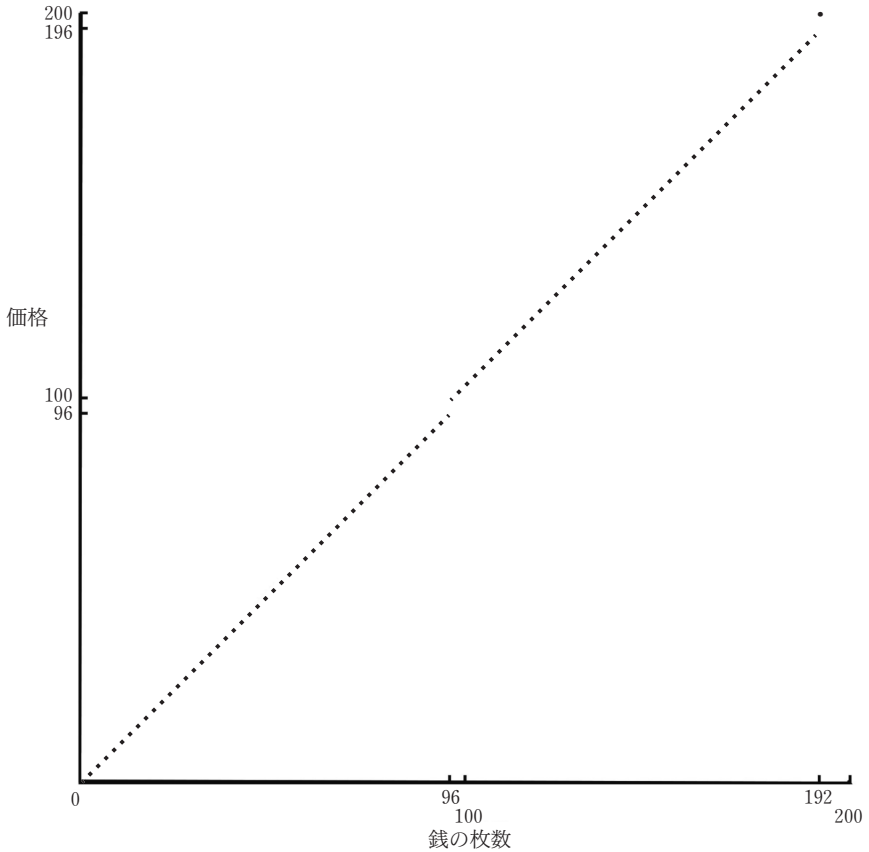


図1 短陌値96の位取り方式の価格

取り方式と比例定数方式の価格が違っていることがわかる。位取り方式は名目額と実枚数の組み合わせで、比例定数方式は名目額で、価格表示している。そのため、名目額と実枚数による価格の相違が生じることとなる。

また、銭と銀とでは価格体系の原理が異なっている。なぜなら、銭は計数貨幣であるから枚数を数えるが、緡銭が短陌のとき、緡銭による価格は名目価格で（たとえば96枚で100文というように）、端数は実枚数の価格（たとえば95枚で95文）であって正比例しないのに対して、銀は重量がそのまま価格をあらわす秤量貨幣で、銀の量と価格は正比例するからである。

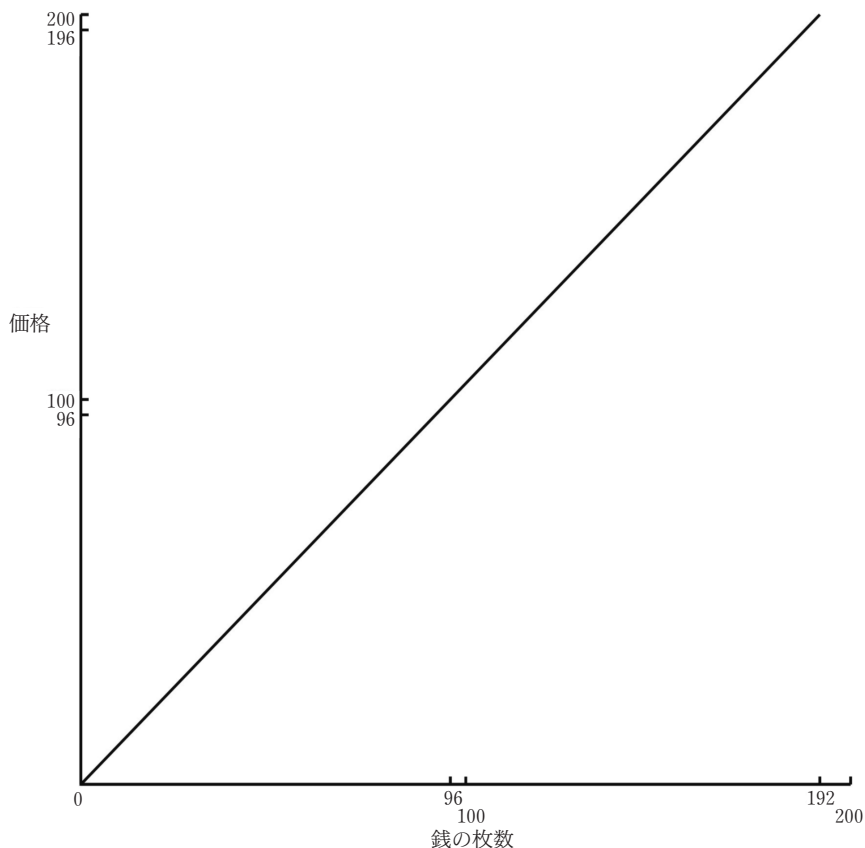


図2 短陌値96の比例定数方式の価格

さらに、銭はその個数を価格として表示することによって、その値は正数値をとり、小数点以下の端数が存在しない。それに対して、銀は重さを価格として表示するため、その値は正数がとれるのはいうまでもなく、小数点以下の端数も表現できる。言い換えれば、銭は離散的な値で価格を表現しているのに対して、銀は連続的な値で価格を表現しているのである。

つまり、銭から銀、銀から銭への換算方法は価格体系の変換を意味する。これは短陌が存在する社会の場合、銭と銀の価格表示が対称的でないことを示している。

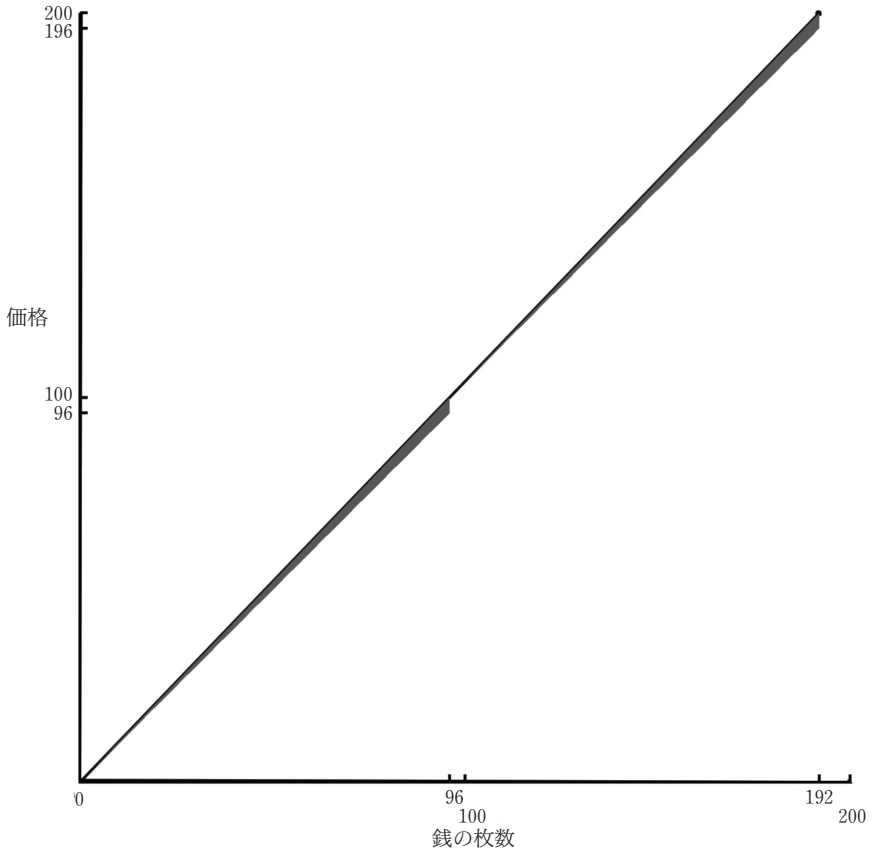


図3 短陌値96の位取り方式と比例定数方式の価格差

位取り方式だけで計算する銭単独の世界に、比例定数方式の銀が登場すると、銭と銀との二つの方式が混ざることになる。日本における比例定数方式の登場は、銀による価格計算が普遍化し、銭と銀がリンクするにいたった貨幣経済の段階を表現する。

以上のように、短陌の計算方法を検討した。短陌の計算方式は、位取り方式と比例定数方式に二分できる。中国宋代では国家財政における比例定数方式と商品流通の使用の位取り方式とにわかれた。それに対して、日本では位取り方式のみの使用が銭単独使用の世界であり、比例定数方式の登場が銭と銀がリン

クした世界と区別できる。

おわりに

以上のように、緡銭の実態と短陌の計算方法の分析を通じて、緡銭の歴史的変容を考察してきた。

中世日本では、緡銭を使用するさい、2つの特徴を有していた。ひとつは、百枚未満の銭を百文として使用する短陌であり、いまひとつが、異なる銭種がある一定の比率で混在する緡銭である。前者は中世後期ごろから「九十七文銭」や「九十六文銭」など様々な値の短陌が併存していた状況にあったこと、後者は混在している銭が使用できる範囲でないと銭貨として使用できないこと、を明らかにした。一緡の中に異なる銭種を含み、しかも異種銭貨の間に相場が立つ場合（たとえば精銭と悪銭のように）、短陌の計算はやや複雑になる。本稿では検討していないが、千枝大志が明らかにした伊勢神宮地域の事例は、それを示す格好のものである。

短陌の計算方法は、短陌の値を位取りとして用いる位取り方式と短陌の値を比例定数として用いる比例定数方式の二方式が存在する。中世日本（少なくとも銭貨使用の場）では、位取り方式のみ用いており、比例定数方式を用いた事例は存在しない。日本において比例定数方式を用いるようになるのは、銭から銀、銀から銭に交換するときである。短陌を前提とするとき、銭と銀の価格体系は同じではない。そのため、銀の価格を表示するには、短陌の計算方式を位取り方式から比例定数方式に変換する必要があった。つまり、比例定数方式の登場が、銭単独の世界から、銭と銀がリンクした世界へと転換したことを意味しているのである。

では、比例定数方式はいつ登場するのであろうか。この点については、流通手段・価値尺度としての銀の普遍化問題と深く関連すると考えられ、改めて検討を要するだろう。今後の課題としたい。

註

- (1) 天正11年(1583)、ルイス・フロイスが著した記録に「われわれの間では銅

の貨幣は完全なものである。日本では中央に穴があいている」という記述がある。これは当該期におけるヨーロッパと日本との銅銭の差異を的確に示したものと いえるだろう。ルイス・フロイス著、岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』（岩波書店、1991年）を参照。

- (2) 小葉田淳『日本貨幣流通史』（刀江書院、1969年、初版1930年、以下小葉田淳著書A）。同『日本歴史新書 日本の貨幣』（至文堂、1958年、以下小葉田淳著書B）。
- (3) 石井進「銭百文は何枚か」（『石井進著作集 第十巻』岩波書店、2005年、初出1988年）。
- (4) 渡政和「絵画資料に見る中世の銭—緡銭の表現を中心に—」（『埼玉県立歴史資料館 研究紀要』15・16号、1993・1994年）、同「中世文献史料における「緡銭」表現について」（『出土銭貨』5号、1996年）、同「銭貨—考古・文献・絵画資料からみた緡銭の表現—」（『歴史手帖』24巻7号、1996年）。
- (5) 伊藤俊一「省陌法をめぐる」（同『室町期荘園制の研究』塙書房、2010年）。
- (6) 千枝大志「十五世紀末から十七世紀初頭における貨幣の地域性」（同『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』岩田書院、2010年）。
- (7) 伊藤俊一は前掲註(5)論文のなかで加減乗減という計算方法を取り上げている。
- (8) 宮澤知之「唐宋時代の短陌と貨幣経済の特質」（同『宋代中国の国家と経済—財政・市場・貨幣—』創文社、1998年、初出1988年）。
- (9) 宮澤知之「魏晉南北朝時代の貨幣経済」（『鷹陵史学』26号、2000年）。
- (10) 前掲註(4)渡政和論文を参照。
- (11) 前掲註(2)小葉田淳著書Bを参照。
- (12) 前掲註(6)千枝大志論文を参照。
- (13) 「渋谷文書（渋谷謹次所蔵）」5号（『広島県史 古代中世資料編IV』）。
- (14) 及川亘「中・近世移行期の都市商人と町」（勝俣鎮夫編『中世人の生活世界』山川出版社、1996年）を参照。
- (15) 「善福寺文書」（『防長風土注進案 13 山口宰判 下』）。
- (16) 本多博之『戦国織豊期の貨幣と石高制』（吉川弘文館、2006年）を参照。
- (17) 前掲註(6)千枝大志論文、前掲註(16)本多博之著書などを参照。
- (18) 桜井英治「銭貨のダイナミズム」（鈴木公雄編『貨幣の地域史—中世から近世へ—』岩波書店、2007年）。
- (19) 「守光公記」永正12年（1515）4月27日条（『大日本史料』第九編之五）。
- (20) 『北野天満宮史料 古文書』73号-3（北野天満宮史料刊行会）。
- (21) 『鹿苑日録』明応8年（1499）12月28日条（続群書類従完成会）。
- (22) 『大日本古文書 家わけ四 石清水文書』802号。

- (23) 鍛代敏雄『戦国期の石清水と本願寺—都市と交通の視座—』（法蔵館、2008年）を参照。
- (24) 拙稿「中世後期における「撰銭」の実態—「悪銭替」と「悪銭売買」—」（『古文書研究』69号、2010年）。
- (25) 前掲註（6）千枝大志論文を参照。
- (26) 前掲註（8）宮澤知之論文。
- (27) 宮澤知之によれば、短陌の計算方法は位取り方式と比例定数方式の二方式あり、これ以外にはないと指摘する。
- (28) 伊藤俊一が前掲註（5）論文で取り上げた加減乗減の計算方法は位取り方式を指すと考えられる。
- (29) 「永禄三年目代慶世引付」永禄3年（1560）9月9日条（『北野天満宮史料 目代日記』北野天満宮史料刊行会）。
- (30) 八嶋屋については、高橋大樹「中世北野社御供所八嶋屋と西京」（日次紀事研究会編『年中行事論叢—『日次紀事』からの出発—』岩田書院、2010年）を参照。
- (31) 西京からの貢納については、貝英幸「中世末期村落の変質と祭礼—西京を中心に—」（『京都民俗』20・21号、2004年）を参照。
- (32) 『大日本古文書 家わけ第十七 大徳寺文書』3170号。
- (33) 『因帰算歌』（『江戸初期和算選書』2巻-2、研成社）。
- (34) 『塵劫記』（『江戸初期和算選書』1巻-3、研成社）。
- (35) 下平和夫『江戸初期和算書解説』（『江戸初期和算選書』1巻-1、研成社、1990年）。
- (36) 「寛永八年年行事帳」（『北野天満宮史料 宮仕記録』北野天満宮史料刊行会）。
- (37) 「慶安三年年預帳」（『北野天満宮史料 年行事帳』北野天満宮史料刊行会）。
- (38) 「寛文三年年預帳」（『北野天満宮史料 年行事帳』北野天満宮史料刊行会）。